諒恕されたい。もちろん「燕の子安貝」までの旧稿にも、近年公刊された諸家の業績をできるだけ参考して加筆してある。

一、本書はもっぱら先賢諸家の注釈・研究に負って成ったものである。つつしんで謝しまつる。

昭和三十五年九月　著者

目次

はしがき……五
一　かぐや姫おひたち……九
二　つまどひ……三
三　仏の御石の鉢……天
四　蓬莱の玉の枝……六五
五　火鼠の皮衣……九七
六　竜の頸の珠……一一四
七　燕の子安貝……一四〇
八　御狩のみゆき……一五九
九　姫の昇天……一八一
解　題……二三六
参考文献……二五一
語句索引……二五六

一　かぐや姫おひたち

一今は昔、二竹取の翁といふ者ありけり。三四野山にまじりて、五竹を取りつつ、六よろづの事につかひけり。七名をば八さるきのみやつことなむいひける。九その竹の中に、一〇もと光る竹なむ一筋ありける。一一あやしがりて寄りて見るに、一二つつ筒の中光りたり。一三それを見れば、一四三寸ばかりなる人、いとうつ

通釈　今ではもう昔のことであるが、竹取の翁というものがあった。野や山に、はいりこんで、竹を取り竹を取りして、その竹をいろいろなことにつかった。翁の名は、さるきのみやつことといった。（あるときとった）その竹の中に、根もとが光る竹が一本あった。不思議に思って、そばへ寄ってみると、竹の筒のなかが光っている。それを（よく）みると、三寸ぐらいの人がたいへんかわいらしいすがたで（その筒の中に）いる。翁が言うことには、「わたしが毎朝毎晩見る竹のなかにいらっしゃるので、（ちゃんと）わかりました。あなたは、私の籠―子におなりになるはずの人のようです」というわけで、手のひらに入れて、家へ持ってきてしまう。妻である女にあずけて育てさせる。そのかわいらしいこと